

ふるさとは菟原住吉

辻 憲男 (文学部教授)

昭和20年(1945)5月、谷崎潤一郎は岡山県津山へ再疎開した。戦争が激しくなり、前年に移った熱海の別荘も危うくなったからである。途中、神戸の魚崎の家に、荷物を片づけに立ち寄った。神戸は3月の空襲で深江や御影が焼かれ、毎日のようにB29が焼夷弾を落とした。この時もだれよりも先に防空壕へ逃げ込んだ。松子夫人の持仏の観音さまと、発表のあてのない『細雪』の続稿だけはしっかりと持ち込んで、爆撃の轟音のなかでじっと耐えた。

7月にさらに岡山県勝山に引っ込んだ。魚崎の住吉川沿いの留守宅は、8月6日の空襲で焼けた。「今はわれらも帰るに家なき流浪の民とはなりぬ」。

草枕旅寝の床にしのかげな焼野が原のふるさとの月

8月13日に永井荷風が勝山に訪ねて来た。岡山市で焼け出され、カバンと風呂敷包みしか持っていなかった。小説の原稿を託された。勝山へ来たような様子だったが、食料の調達めどが立たなかった。谷崎夫妻は酒とすき焼きでもてなした。15日の昼前に荷風は帰っていった。松子夫人のつくった豪華な弁当を車中で食べた。正午から終戦のラジオ放送があったが、谷崎はよく聞き取れなかった。荷風先生は岡山駅に着いてから“休戦”を知った。日記『断腸亭日乗』にはただ一言「恰も好し」(あたかもよし)、祝宴を開いたとある。



昭和19年4月、谷崎は東海道線の住吉駅から汽車に乗った。
「故郷の花にころをを残しつつたつやかすみ菟原住吉」の歌碑が駅隣の阿弥陀寺に建つ。菟原(うはら)は旧郡名。